
リリカルギアス～白の軌跡～

なるち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルギアス〜白の軌跡〜

【Nコード】

N68950

【作者名】

なるち

【あらすじ】

敗戦国日本は自由と、権利と、そして名前を奪われた。ARE A11、その数字が新しい名前だった。終戦7年後の皇歴2017年。そこで名誉ブリタニア人の少年は同じく名誉ブリタニア人である少女と出逢う。その出逢いが2人の運命を変えていく。

STAGE 01 覚醒の白き騎士（前書き）

注意

この小説にはリリカルなのはのキャラが出ますが、世界観はコードギアスに基づいています。

なのでギアスキャラはもちろんのこと、リリなのはキャラも敵を殺します。

また、なのはは劇場版設定を引き継いでおり、バリアジャケットやデバイスはそちらの物となっています。ついでに言うと、ナイトメアも作者の他の小説と同じく、パイロットを元に機体を擬人化した様な状態です。

これらが受け入れられない方はお戻りください。

プロローグ

皇歴二〇一〇年八月一日、神聖ブリタニア帝国は日本に宣戦布告した。極東で中立を謳う島国と世界唯一の超大国ブリタニア。両者の間には日本の地下資源を巡る根深い外交上の対立があった。

本土決戦に於いて、ブリタニア軍はアーマードバイス・ナイトメアフレームを実戦で初めて投入。その威力は予想を遥かに超え、日本側の本土防衛線はナイトメア部隊によって悉く突破されていた。後半になるとナイトメアフレームだけではなく、魔導師が投入された。それは魔力を用いて敵を殲滅する者。機械に頼らなければ飛ぶことが出来ない一般の人間とは異なり、単独で空を飛ぶ事さえ可能としてしまう。

それらの圧倒的な威力の前に、対抗できる国などあるはずが無かった。元よりナイトメアはブリタニアが先駆国。そして魔導師こそ他の国にも存在するが、超大国ブリタニアを含めてもその数は圧倒的に少ない。その反面能力は高く、どの国においても重宝される存在だった。

その中でも超大国であり先進国でもあるブリタニアの魔導師は群を抜いて優秀で、たった一人で戦局を簡単に変えてしまう程だった。ブリタニア圧倒的優位で始まったこの状況は終始変わることは無く、後に『厳島の奇跡』と呼ばれる出来事のみがブリタニアに泥を付けただけだった。

にも関わらず、本土防衛戦の後半においては『金の閃光』『夜天の魔女』『烈火の将』『紅の鉄騎』の二つ名を持つ四人の魔導師が投入され、その圧倒的な能力を前に抗うことすら許されなかった。

日本は帝国の属領となり、自由と、権利と、そして名前を奪われ

た。^{エリア}AREA 11。その数字が敗戦国日本の新しい名前だった。
「僕は……スザク、僕はブリタニアをブツ壊す！」
戦争終結後の焼け野原に座り込む茶髪の少年と美しいプラチナの髪をした少女、黒い髪の少年が居る。この黒い髪の少年が口にした言葉が全ての始まりだった。

STAGE 01 覚醒の白き騎士

——終戦七年後 2017 a . t . b . イレヴン居住地 シン
ジクゲットー

日本の——いや、エリア11の中心都市であるはずのトウキョウ。この都市は今、旧山手線である環状五号線を境目にして内と外とで完全に違う街と化していた。

内側にはブリタニア人が住む租界が、外側にはイレヴンが住むゲットーがある。太陽光によるエネルギー供給を始めとした都市機能のほとんどは租界で賄われており、環状線の内と外とでは生活環境に大きな差がある。

租界では誰もが普段目にするようなごく当たり前の生活が営まれている。対してゲットーは最早『街』と呼ぶ事すら躊躇われてしまふ程の廃墟と化している。

しかし人間は適応力が高いというか、しぶといというか。追い込まれてしまえばそんな劣悪な環境の中でも案外生きていけるようだ。そして今、このゲットーに金属鎧を纏った兵士たち——ナイトメア部隊がそこらじゅうを走り回り、それを与えていない一般兵も銃を装備して忙しなく走り回っていた。というのもこの時、ある作戦が発令されていたのである。エリア11のテロリストに『毒』を盗まれたブリタニアが彼らの掃討作戦に打って出たのだ。

イレヴンであれば赤子であろうが女性であろうが老人であろうが

関係無い。兵士たちが視界に捉える全てのイレヴンを排除している。そのおかげであちらこちらから悲鳴が聞こえて来ていた。

「ざあゝんねでした！」

そんな中、事態の中心となっている場所から少し離れた場所には紫色をした乗り物、ブリタニア軍の指揮用陸戦艇・G-1ベースがあった。さらにその付近には救護用のトレーラーが何台か止められており、その中に今のおちやらけた声が響いた。

「っ！？」

「天国に行きそびれたね、枢木一等兵」

「ロイドさん！ そんな言い方駄目ですよ」

その声のせいで意識が覚醒した。癖のついた茶髪の少年が目を開けるとすぐに、どこまでも失礼な言葉が聞こえてくる。しかし可愛らしい声が失礼な発言をしたであろうロイドと呼ばれた男性を咎める。

彼は『はいはい』と返事をしているが、その声色には反省の色が全くといっていいほど含まれていなかった。

「あの——うぐっ、ここは？」

「ん？ ああ、まだシンジユクゲットー」

「クロヴィス殿下の近くだから一番安全なところだけど」

「スザク君、これが君を守ったんだよ」

「防護スーツ内での跳弾を防いだだけなんだけどね」

上体を起こした少年——スザクは腹部に痛みを感じた。しかしそれがまだ自分が生きていることを実感させる。

長い茶髪を左側でサイドアップにしている少女が白い布に包まれていた懐中時計を差し出して来た。スザクはそれを受け取りつつも目の前に居る三人を視界に捉えていた。

メガネを掛け、薄い紫の髪をした細身で長身の男性。先程スザクに中々失礼な発言をした男性だ。続いて紺色の髪をした優しそうな女性。そして最後に、つい今し方スザクに懐中時計を差し出してきた少女。一目見て彼女はブリタニア人ではなく、日本人だと分かつ

た。

「大切な物？」

「あ、はい」

「イレヴンには物に神様が宿るって信仰があるそうだね。こういうのも——」

「あの、ルル——状況はどうになりましたか？」

スザクは思わず親友の名を言いそうになってしまった。言ったところでこの三人には分からないだろうが、状況が状況だけに名前を出さない方がいいことくらい考えるまでも無かった。

「毒ガスは拡散したらしいよ。イレヴンが大量に被害に遭ったって」「犯人はまだ見つかってないって」

「そうですか、まだ……」

「枢木一等兵、君、ナイトメアフレームの使用経験は？」

ロイドが突然話題を変えてきたのだが、それはスザクには本来聞かれる筈も無いような内容だった。

「えっ、まさか。イレヴン出身者は騎士にはなれません」

「なれるとしたら？」

「え？」

そう、スザクの言う通り、イレヴン出身者にナイトメアフレームが与えられることなどありえない。故にスザクにナイトメアの使用経験があるはずもない。しかし茶髪の少女が金色のUSBメモリらしきものをスザクに見せる。それは待機状態であるナイトメアだった。

「おめでとう！ 世界でただ一つのナイトメアが君を待っている」

「乗れば変わるよ。君も、君の世界も」

「望もうと、望むまいとね」

救護トレーラーでそんなやり取りが行われている間に状況は一変していた。ブリタニア軍によって一方的にやられていたはずのテロリストが息を吹き返し、突然押し返し始めたのである。

それはもう驚愕以外のなにものでもなかった。次々と部隊の反応

がロストしていく。

「ロストしました！」

「コードを変更しろ！ 通信が傍受されているんだ」

「やっています！ 既に四回！」

「もう一度だ！」

「何という失態か！」

「も、申し訳——」

部下の余りの失態にとうとうクロヴィスが怒鳴り声を上げた。彼の副官であるバトレーは謝るほかない。そうしかけた時、モニターいつぱいにロイドの顔が映し出された。

「こんにちわ！」

「何だ！ 作戦行動中に！」

相変わらず人をおちよくっているようなテンションで登場したロイドに、鬱陶しいと言わんばかりにバトレーが返す。

しかしロイドもロイドだ。そんなことお構いなしにいつものテンションで続ける。

「いやあ、そろそろ特派の嚮導兵器を——」

「今はそれどころではない！」

怒り心頭のクロヴィスはロイドたち特別派遣嚮導技術部——通称・特派の話など耳にも入れず、とにかくテロリスト殲滅を最優先にとしている。そしてモニター上では、また一つの部隊の反応が消える。

「ラズロー隊の反応が消えました」

「今だ！ クインシーの部隊を上げろ」

「殿下、それでは包囲網が」

「抜けた穴にはこちらの守備部隊を回せばいい。今敵の一団がここに居るのは確実なのだ！」

クロヴィスの指示通りに部隊は動く。テロリストの反応を捉え、そこに向かって部隊は包囲網を縮小するように近付いていく。

「よし、エルスたちも向かわせる。囲いつつ戦力を集中！ テロリストの主要戦力は中心点に居る。叩き潰せ」

中心点に向かって集まっていく部隊を見たクロヴィスは勝利を確信した。これでようやく終わったと。だが次の瞬間、テロリストの反応が突然消失した。

「何！？ 敵が居ない！？」

そして今の今まで反応があつた場所を中心にしてが放射状に赤く染まっていき、その範囲に入ったナイトメア部隊の反応が消えていく。

ついにはそこに向かった部隊が全滅するという結果となつた。

（誰だ…… 私は誰と戦っているのだ。コイツ、まさか藤堂よりも！？）

見えない相手に底知れない恐怖を感じたのか、クロヴィスは無意識の内に後ずさつた。どうすればこの相手に勝てるのか。必死に考えても打開策は見つからない。しかし咄嗟につい先ほどの事を思い出し、氣付けば叫んでいた。

「ロイド！」

「あ、はい？」

「勝てるか？ お前のオモチャなら」

「殿下、ランスロットとお呼び下さい」

特派の指名にロイドはニヤリとした笑みを浮かべるのだった。それからすぐに出撃の準備が始まる。とはいってもスザクがランスロットを起動させ、ロイドたちはそのデータを取るだけなのだからすぐに終わってしまうのだが。

『マニユアルは？』

「おおよそは」

『さすがだね。シュミレーターとはいえトップクラスだもんね』

「あの、さっきの話だけ」

『あり得るけど、可能性はゼロに近いよ』

「でもゼロじゃないんだよね？」

『それはそうだけ』

上半身は裸で包帯が撒かれ、下半身は一般兵に支給されるこげ茶

色の軍服という出で立ちで救護トレーラーから出てきたスザクは、真っ直ぐに特派ヘッドトレーラーへと向かう。

ロイドたちはクロヴィスに許可をもらう通信を行うために先に戻っていた。後を追う形となったスザクは右耳に付けているインカム越しに話している。

『でも無茶はしないでね』

「うん。分かってるよ、なのは」

先程からスザクと話していたのは茶髪の少女で名前を高町なのという。やはりスザクが思った通り日本人で、名誉ブリタニア人だった。ちなみに紺色の髪の女性はセシル・クルーミーだと教えられた。

スザクが特派ヘッドトレーラーに入ると、なのはが近付いて来て手を差し出した。その手にはさっきも見た金色のUSBが握られている。

「はい。データを取るけどそっちに違和感とかは無いはずだから」

「ありがとう、分かったよ」

「気を付けてね」

そう告げるとなのはは階段を上ってロイドとセシルがいる場所へ戻って行った。すると、インカムからセシルの声が聞こえてきた。

『個体識別情報、登録完了。嚮導兵器Z-01ランスロット、起動して下さい』

「了解。ランスロット、セットアップ！」

トレーラーの後部ハッチが開き、そこから数歩外に出たスザクがランスロットに起動命令をだすと一瞬だけ白い光に包まれ、直後には白を基調として縁などの一部が金色でカラーリングされた鎧を纏っていた。鎧の胸部中央には赤い宝石の様な物があるのが少し目を惹く。

そして頭部にはヘルメットの様なパーツがあり、明るい緑のバイザーが顔の上半分を覆い隠していた。もちろんこのバイザーにも意味はあり、ランスロットが自動で感知した反応などを映したりする

役割がある。

その金属鎧の下は白を基調としたパイロットスーツになっており、胸部から腕にかけては黒色となっている。白と黒の境界やその他の一部に金色のラインが入っているのも特徴か。

「これが……」

『そう、私たち特別派遣嚮導技術部による試作嚮導兵器、ランスロット。世界で唯一の第七世代ナイトメアフレームよ』

身体を沈みこませ、左腕を上げて右腕を前に突き出す。刻一刻と出撃の瞬間が迫ってくる。目を閉じて深く息を吸い込み、ゆっくりと吐き出して心を落ち着かせる。

「ランスロット、MEブースト」

大地を素早く移動するために足に装備されているランドスピナーが勢い良く回転を始め、粉塵を巻き上げる。

『出撃！！』

その合図が出るや否や、スザクは急発進して尚も加速してテロリストが居る場所へと向かう。そのスピードは今までのどのナイトメアフレームよりも速く、決して追いつける速さではなかった。故にトレーラー内には凄い風圧がかかり、なのはたちは尻餅をついていた。

「ははははは、いきなりフルスロットルか」

尻餅をつきながらも、ロイドは心底嬉しそうに笑っていた。

「マニュアル以上だ。魔導師に匹敵するかも——ぐっ」

スザクが思っていたよりもさらにスピードが出ている。それだけで撃たれた腹部が痛むのか、苦痛に顔を歪めて抑えている。

しかしそんな事をしている暇はない。テロリストがブリタニアから奪った機体——サザーランドはもう目前に迫っているのだから。

「あ？　なんだありや。サザーランドにしちゃ——」

蛇行しながら物凄いスピードで迫るスザクにテロリストは何を悠長に考えているのか。反応を感知してから僅か二、三秒で距離は無くなり、手刀での左薙ぎが打ち込まれた。左側頭部にモ口に喰らっ

てしまったテロリストは近くに建っていたビルまで簡単に吹き飛んだ。

尚も前進すると同じくサザーランドを使用している四人のテロリストグループが現れるが、所詮その程度で今のスザクを止めることなど不可能だった。彼らにも同じく手刀を用い、あっという間に撃墜していく。

さらに後続のグループが現れ、離れた位置から数丁のアサルトライフルが一斉に火を噴く。今のランスロットにはアサルトライフルの様に射撃が行える武器は実装されていない。だというのにスザクは落ち着いて右腕を胸の前に持つて来る。すると下腕からバイザーと同じ色をした薄い板状なものが発生した。

迫り来る何発もの弾丸がそれに当たっては明後日の方向へ弾かれていく。その正体はサクラダイトによってエネルギー場を発生させ、様々な攻撃を弾くエネルギーシールド・ブレイズルミナス。

それ以前にサクラダイトとは何かという事になるが、それは電気抵抗が無い超伝導物質として機械技術に欠かせない資源なのである。そのことにおける重要性から世界の安全保障に直接関わることとなり、毎年サクラダイトの国際分配レートを決めるためのサクラダイト生産国会議が開かれている。

ちなみにエリア11は市場供給量の七〇%を占めており、それが原因で日本とブリタニアには確執が生まれていったのだ。

ブレイズルミナスを消したスザクは蛇行して近付き、手刀を打ち込んで1人を撃墜。次いで右腕を前に突き出すと右下腕の外側にあるパーツが左右に開いて射出された。テロリストの胸部に命中しても尚勢いは留まらず、そのまま後方にある建物まで一気にもっていった。

先程射出されたパーツはスラッシュハーケンと呼ばれるワイヤー付きの錠型射出武器だ。基本的に誘導は出来ず、ロケットモーターによって直線的に射出し、ワイヤーを巻き上げて戻す。

しかし世界初の第七世代ナイトメアであるランスロットのそれが、

その常識に捉われる事は無い。

右のスラッシュハーケンを巻き戻しつつ、左手のスラッシュハーケンを地面に向けて射出する。するとそれまでの世代のナイトメアを遥かに超える出力を誇るランスロットのそれは、その威力によってスザクの身体を容易く空へと押し上げる。

「くそっ！」

テロリストはスザクに向かってアサルトライフルを連射するが一発も掠らない。そして重力に従って落ちてきたスザクが、かかと落としの要領でランドスピナーの車輪部分を彼の右の首元へと打ち込んだ。

「よし、やれる。このランスロットなら一気に！」

さらに現れた後続グループがアサルトライフルを撃ってくるがブレイズルミナスの前には何の役にも立たない。

今度はスラッシュハーケンを射出するのではなく、突き出したメッサーモードにより手刀を強化しての一撃でテロリストを斬り裂いていく。彼らから血が噴出するがそれがスザクに降りかかるよりも早く、既に次の相手の所へ動いている。

テロリストは胸部に搭載されている二基のスラッシュハーケンをスザクに向けて射出するが、器用にもその間を潜り抜けて射出された左下腕のスラッシュハーケンがテロリストを地に沈めた。

さらにはビルのある狭い路地を、ビル壁を利用して巧みにアサルトライフルの弾丸をかわしてリアットをぶちかます。

個人が圧倒的戦闘能力を誇る魔導師に対して、数で押す事が目的で開発されたデバイス・ナイトメアフレーム。しかし今テロリストの前に立ちはだかる、たった一人の白き騎士は彼らにとって魔導師に等しかった。

（僕が全てのテロリストを倒せば戦いは終わる。何としてもルル・シュとあの子を助けないと）

その時、ランスロットが前方にあるビルの一角に熱源反応を感じた。それはすぐにバイザーに表示され、スザクは左手のスラッシュ

ユハーケンをビルに撃ち込んだ。そしてワイヤーを一気に巻き上げて僅か数秒でそのポイントに到達する。

即座にランドスピナーを走らせ、そのテロリストに手刀を見舞う。今までのテロリストよりは幾分マシな反応を見せた。腕を交差させることで、一撃での撃墜は免れた。だがランスロットのパワーはザーランドのそれとは比較にならない。一方的に奥へと押し込んでいく。

「お前が指揮官だな！」

「たかがデヴァイサーがよくも！」

しかしそれが幸か不幸か、脆い場所に踏み込んでしまったらしく床が抜け落ちた。廃ビルの最下層、つまりは地上まで落ちた敵の指揮官は逃げ出そうとするが、スザクがそれを許すはずが無い。跳躍したスザクは彼の十八番である空中回転蹴り——正式名称は陽昇流ひのぼりりゅう誠壹式旋風脚——を叩き込んで吹っ飛ばした。

何とか起き上がろうとする敵指揮官にスザクがスラッシュハーケンを撃ち込もうとした時、横から紅のカラーリングをした旧世代のナイトメア、グラスゴーを使用したテロリストが現れて右拳を突き出してきた。言うまでも無いことだが、サザーランドよりもパワーが劣るそれがランスロットに敵う筈が無い。

苦し紛れに射出してきたスラッシュハーケンも、スザクは空いている右腕で容易く受け止めて握りつぶした。

（ここまでか）

紅いナイトメアの使用者は腕の装甲をパージした。それに向けてアサルトライフルを撃ち込むとそれは爆発してちょうどいい具合に煙幕となった。

「指揮官を追うのが先決だな」

紅のテロリストが割り込んだ隙に逃走していた指揮官を即座に追跡する。向こうが先に逃げていたとはいえ、スピードはランスロットの方が断然上だ。追いつくのはそう難しいことではなかった。

スザクが思った通り、少し走ればすぐに指揮官の後ろ姿が見えた。

向こうもスザクに気付いたのか、アサルトライフルを二人の間にあるビルに向けて連射した。崩れた瓦礫が雪崩のようにスザクへ落ちてくる。

だがそれさえも、超人的な身体能力を持つスザクと驚異的な性能を持つランスロットの前には無意味なものではない。身体を捻りながら瓦礫の合間を針の穴に糸を通す様な正確さで抜けたのだ。

「アイツ！ 無駄に被害を増やして——ん？」

もう少して追いつく、という時だった。ランスロットが上方に何らかの反応を感知し、バイザーに映し出される。

「きやあああああああ！」

感知した反応は先程の敵指揮官による射撃のせいで崩れたビルの瓦礫に交じって落ちて来る人だった。スザクはその場で百八十度の急旋回し、右腕のスラッシュハーケンを地面に向けて射出して跳躍し、落ちて来る女性を受け止めた。

その隙に敵指揮官は離脱していった。もちろんスザクが人助けをしている様子は特派のモニターにしっかり映し出されていた。

「はあ？ 人助け？」

「そうみたいですわ」

「ふうん。変わってるなあ」

ロイドのその発言になのはとセシルが『あなたには言われたくない』と思ったのはまた別の話。そしてスザクが人助けをしているシンを見たなのは顔は少しだけ笑顔になっていた。

「スザク君、疲れたでしょ？ 終わりにする？」

『いや、やるよ』

「魔力残量に気を付けてね——！」

「はい！」

外に出て行ったロイドがスザクの魔力残量に注意を払うように警告を送ってきた。ナイトメアというのは使用者の魔力で動いているのだが、第七世代であるランスロットは高パフォーマンスの代償として従来のナイトメアよりも多くの魔力を必要とするのだ。

スザクの魔力量はかなり多い方だが、ランスロットを使用すれば彼がサザーランドを使用した状況と比べると遥かに使用時間が短くなってしまうのである。

それ以前に魔力があるなら魔導師になればいいと思うかもしれないが、そう上手くいかないのがこの世の中なのである。

というのも、魔力というエネルギーは生まれつき誰だつて持っている。だがそれを魔法として使用するためにはリンカーコアという魔力エネルギーを魔法を行使するための力へと変換するものが無ければならない。

だが魔力とは違い、それは先天的に持っているかどうかであるため、後天的に得る事は出来ない。そして、そのリンカーコアを持つて生まれてくる可能性は極めて低い。魔導師という存在が少ないのはそれ故なのである。

「いやあ、最高のパーツだな、彼」

そんな事を呟くロイドの背後では、一人のブリタニア兵士がクロヴィスの乗艦に歩み寄っていくのだった。

それから少しして、もうすぐこの戦闘も終わろうかという時だった。

「全軍に告ぐ。ただちに停戦せよ。エリアー1総督にして第三皇子、クロヴィス・ラ・ブリタニアの名の下に命じる。全軍ただちに停戦せよ」

戦闘領域に響き渡るクロヴィスの声。突然の停戦命令にブリタニア兵士たちだけでなく、殺される寸前にまで追い詰められていたイレヴンたちも啞然としている。

「建造物等に対する破壊活動も止めよ。負傷者はブリタニア人、イレヴンに関わらず救助せよ。クロヴィス・ラ・ブリタニアの名の下に命じる。ただちに停戦せよ。これ以上の戦闘は許可しない」

これが、ブリタニア兵士やイレヴンにとって最後となるクロヴィ

スの
声だ
った。

STAGE 01 覚醒の白き騎士（後書き）

スザク成分が足りないのでやってしまいました。

もっとも、この小説の案自体はかなり前からありましたが・・・。

タイトルからも分かると思いますが、『白の軌跡』ということで、スザクとなのはが中心の物語なので、黒の騎士団側を描く事はあまりないと思います。

感想など頂けると嬉しいです。

STAGE 02 その名はゼロ

プロローグ

皇歴2010年8月10日、神聖ブリタニア帝国は日本に宣戦布告した。

ブリタニアの最新デバイス・ナイトメアフレームと、世界でも最強クラスの能力を持つ四人の魔導師を前に、二週間とたたず敗れ去った日本は、自由と伝統、権利と誇り、そして名前を奪われた。

^{イレヴン}11。その数字が新しい日本人の名前だった。

それから七年の月日が流れた。

エリア11で二組の少年と少女の出逢いがこれからの世界を変えていくことを、当時の彼らはまだ知る由もなかった。

STAGE 02 その名はゼロ

イレヴン居住地、シンジクゲットーではつい先ほどまで戦闘が行われていた。

いや、それこそ最終的には戦闘と呼べるようなものではあったが、開始当初はともではないがそう呼べるものではなかった。

ブリタニア軍人の視界に入る人間がイレヴンであれば赤子、女性、老人など、本来ならば『戦場』というものに縁遠い者であったとしても容赦なく射殺していく。

それはもう『戦い』と呼ぶべきものではなく、『虐殺』と呼ぶべき光景と化していた。

ブリタニアに反発する極一部のイレヴンがテロリストとなって僅

かながら抵抗をしていたが、そんなものは焼け石に水でしか無かった。

シンジユクゲッターに居るイレヴンはこのまま皆殺しにされるという運命は決まったかに見えた矢先、転機は訪れた。

突然テロリストが息を吹き返したのである。今までの仕返しだと言わんばかりに、ブリタニア軍に属するナイトメアのデヴァイサー部隊が一方的にやられていく。

総督であるクロヴィスを始め、彼の部下たちはどうしても焦燥感を隠す事が出来ない。

事態の危険性を察知したクロヴィスは、彼の兄の指揮下に在る部隊・特別派遣嚮導技術部に出勤を命じた。

命を受けた特派はすぐに対応し、世界初の第七世代ナイトメアフレーム・ランスロットを、現在特派にスカウト可能な中でシュミレーターで最高値を出した名誉ブリタニア人、枢木スザクへと与えた。彼の戦闘能力は凄まじく、ナイトメアでは初の実戦だと言うのにテロリストに僅かな抵抗も許さずに次々と撃墜していった。

人助いで敵指揮官を逃がしてしまったとはいえ、その時点でテロリストはほぼ壊滅していた。

再びシンジユクゲッターは虐殺が行われる場になるのかとイレヴンの誰もが疑わなかった。

しかしクロヴィスによって突然、戦闘終了の命令と共にブリタニア人、イレヴンを問わず負傷者救助の命が下り、イレヴンにとって悪夢のような虐殺は終わった。

だがスザクにとつての悪夢はまだ終わっては居なかった。

今、スザクは手足を拘束されて薄暗い取調室にいる。周囲には数人のブリタニア軍人。デスクを挟んで前には彼らとは違い、濃い青の服を着て、胸には赤い羽根の留め飾りを付けている深緑の髪をした男が座っている。

その男の名をジェレミア・ゴットバルトという。

純血派。それはブリタニア軍はブリタニア人だけで構成されるベ

きという考えを持つ人々のこと。実質のトップは今この場に居るその男、ジェレミアである。

こんなところで何をするのかといえば、もちろん取り調べである。一方的な、であるが。

その証拠に顔には擦り傷のようなものや殴られた跡が見える。やはり随分と手荒な扱いを受けているようだ。

「この銃、何だか分かるな？ 枢木スザク。クロヴィス殿下殺害に使われたものだ。洗滌痕も確認済み。それと、調べさせて貰ったよ。君は日本最後の総理大臣、その嫡子だそうだな。動機も十分」

「何かの間違いです。自分はこんな銃見たこともありません——ぐっ！？」

スザクが反論しようとするやとすぐ傍に居た男が椅子を蹴り倒し、手足の自由を奪われているスザクは床に倒れるしかない。

「君の指紋が検出されているんだよ。君には親衛隊の殺害容疑も掛かっている。認めたまえ。今ではイレヴンではなく、名誉ブリタニア人として裁いてもらえるぞ？」

「自分はやっていない！ あぐっ！？」

反論すればするだけ拳や蹴りが返ってくるだけ。

それでもスザクは認めようとしな。彼の中には七年前から変わらぬ信念があるから。

一方で特派ヘッドトレーラーでも色々問題が起きていた。が、やはり一番の問題はランスロットのデヴァイサーであるスザクが逮捕されてしまったことだった。

ランスロットの前で嘆いたように立っているロイドに、何かのフアイルを持ったのはが歩み寄っていく。

「んんゝもう、肝心なパーツが無くなっちゃって」

「何とかならないんですか？」

「そうなんだよ。他所のパイロットは所属がガチガチで動かせないし、頼めたとしても彼並みの数値は出せないだろうし。言っちゃった？ 通常稼働率九四％。代わりのパーツと言ったって」

「ですからスザク君を釈放するために」

「彼、名誉ブリタニア人だろ？ バトラー將軍の失脚以降、軍は純血派が抑えてるからね」

「私だって名誉ブリタニア人なのに……」

どうしてスザクなんだろうか。どうして自分じゃないんだろうか。なのはの中でスザクが逮捕されて以降、ずっと答えが出ずに渦巻いている疑問。

スザクはランスロットを駆ってテロリストの殲滅に出ていたのだから自由に動けるはずが無い。むしろクロウイスの乗艦・G-1ベースのすぐ傍に居た自分の方が怪しまれるべきではないのだろうか。なにに実際に逮捕されたのはスザク。いくら考えても答えは出ない。あまりにそればかりを考えていたせいなのか、ロイドの発言にポロリと漏らしていた。

「ああ、確かになのは君も名誉ブリタニア人だけど。君はさ、魔導師の資質を持つてるでしょ？」

「それは……そうですね」

「だからだよ」

「一体それがどう関係あるんですか？」

スザクにはまだ告げていないが、高町なのはは魔導師としての資質を確かに持っている。しかし、なのはの中ではだから何？ という答えしか浮かび上がってこない。

例え魔導師としての資質を持っていたとしても、名誉ブリタニア人であることに違いは無いのだから。

「そうだねえ…… 例えば何処かの学校に運動も勉強もどちらもよく出来る生徒Aと、運動だけがよくできる生徒Bが居たとして」

「はい」

「先生から見てもどっちが優秀な生徒だって言えると思う？」

「それはまあA、ですけど」

「つまりはそういうことさ」

そんなことで、となのはは怒りを覚えた。

今の話に出た生徒AとBを今の世界に置き換えてみればAは魔導師、Bはデヴァイサー、先生はブリタニア帝国という構図が出来上がる。

つまり名誉ブリタニア人であるのはとスザクのどちらかを犯人に仕立て上げようとした時、ブリタニアの利益を考えれば世界的に見ても数が少ない上に意図的に生み出せない魔導師である、なのはを手放すはずが無い。

そしてイレヴンではなく名誉ブリタニア人として従軍しているとというのがポイントの一つなのである。

名誉ブリタニア人が不祥事を起こしたとなれば、純血派が掲げる名誉ブリタニア人制度の廃止を行うことも現実的になってくるのだ。だから後天的にいくらでも輩出できるデヴァイサーでしかないスザクが逮捕されたのだ。

「勝手なんですね。そんな理由で」

「仕方ないさ。国や軍なんてものは、上が黒だつて言えば黒になるんだからさ」

「それでもです」

君の怒りはもっともだ、とロイドは理解を示す。

ただ、なのはの様に非人道的だというような事に対するものではなく、下らない事情で現時点においてランスロットの最高のデヴァイサーを連れて行かれた事に対してという、かなりズレた思考だったが。

薄暗い空間。手足を拘束されて自由を奪われたままの状態でそこにスザクは居る。目の前には通路があるが、そこに出る事は出来ない。

スザクが居る部屋の空間と通路の間には、何の素材なのかよく分からないが頑丈な半透明の板で仕切られているからだ。

その板の向こうには二人の人物が居た。

一人はオレンジに近いライトブラウンの長い髪を左サイドアップにした少女、高町なのは。もう1人は白衣を来た銀髪の男性、ロイド・アスブルンド。

この場の雰囲気にとってもじやないが似合わないロイドのおちゃらけた声が響き渡る。

「おめでとう。君に頼まれていた二人、遺体リストには無かったよ」「そうですか」

「でも君の方は不利だなあ。裁判になっても君の見方はだあれもない」

「しかし、法廷は真実を明らかにする場所です」

「明かされない事の方が多いと思うけどね、真実なんてものは」

「それが世界だというなら自分は・・・、未練はありません」

「・・・、何で？」

なのはの普段よりも少し低い声に、

「え？」

と、スザクは反応した。

ロイドに向けられていた視線は自然と彼女へと移動する。微笑みや苦笑いをする人が多いというのがスザクの記憶には強く残っていたのだが、今の彼女は珍しく怒ったように険しい表情を浮かべていた。

「何でそんな諦めの言葉が出てくるの？」

「それは……正しいルールに則って出た結果なら、何であろうと僕はそれを受け入れる。それに僕一人の犠牲で沢山のイレヴンが助かるなら僕は本望だ」

「そんなわけないでしょ！」

「なの、は」

なのはが物凄い勢いでスザクを睨んでいる。視線で人が殺せるのならば、おそらくスザクはこの場で死んでいるだろう。そう思わせるくらいに力の籠った目で睨んでいる。

「スザク君が犠牲になっても誰も救われない。確かに命だけは助か

るかもしれないけど、エリア１１が解放される訳じゃない。１１つて数字から解放される訳じゃない。そんなの助かったって言える？」

「……だけど命は助かる」

なのはエリア１１やイレヴンと呼ばれている事を引き合いに出したが、結局のところスザクの自分を軽んじているような発言に怒っているということは、スザクにもロイドにも分かった。

まだ出逢ったばかりだというのに、ここまで自分の事を心配してくれるなのは気持は素直に嬉しかった。

だが、例えそうだとしてもスザクは命だけでも助かるほうがいいと思っていた。

「っ！……正しいルールに則ってっていうなら、こうしてスザク君が捕まってること自体おかしいじゃない」

「それでも。それがルールだ」

「ルールを守るって言うのは正しいと思う。だけど、内側からブリタニアを価値在る国に変えるために、そのためにスザク君にも力を貸して欲しかったのに」

「えっ！？」

「間違ったルールでも簡単に受け入れるなんて……もう知らない。行きましよう、ロイドさん」

「え？ あ、うん。じゃあねスザク君」

なのはは不機嫌そうな顔のままロイドを連れて立ち去っていく。なんだか二人の立場が逆転している気がするのだが、気のせいだろうか？

立ち去っていく彼らを視界に捉えながらも、スザクの頭の中ではなのはの言葉がこだましていた。

「内側から変える、か。まさかなのはも僕と同じ事を考えていたなんてね。だけど……」

すまない、とスザクは呟く。この現状ではどうやってもなのはに協力してあげられそうにない。

本当に申し訳なさそうな、何か諦めたような顔で俯いていた。

なのはは不機嫌オーラ全開で通路を歩いている。だというのに結構KY（空気と読めないの頭文字）なロイドは構わずに話しかけた。「本当によかったのかい？」

「何がですか？」

「あんな喧嘩別れしちゃってさ。きつともう会う機会は無いっていうのに」

「いいんです」

そう、ならいいけど、とロイド。本当は全然よくないくせに、というのが彼の思っている事。

まあ後悔はしないようにね、とだけ伝えた。すると別にしてませんから、と冷めた答えだけが返ってきた。

「ロイドさん、さっき私がスザク君の前で言ったことですけど」

「ん？何か言ったわけ？」

「……いえ。何でも無いです」

「そう」

なのはが何を言わんとしているのか分かったロイドはあからさまにとぼけてみせた。彼女も彼の意図をすぐに理解したのか、それ以上何かを言うことも無かった。

後はただ、通路に二人分の足音がひたすら響いているだけだった。

—— 同日 夜

特派ヘッドトレーラーではロイドを始め、特派に属する作業員たちが作業をしている。

大半はランスロットに関してのものだったが、ロイド、セシル、なのはの三人は球体をした小さな赤い宝石のようなものが入れられたケースの前で作業していた。

「スザク君が無実だって私たちは知っているのに」

「法廷が僕らの証言を取り上げないって決めたんだ。仕方ないよ」「でも」

「ねえそれって博愛主義？ 人道主義？」

「こんな時に言葉遊びですか？」

「ほかにやることある？ 君だって知ってるでしょ、こういうケース。サミットであの人とも連絡取れないし、もう諦めるしかないよ。なのは君も諦めたみたいだしね？」

そう言われてセシルがなのはへと視線を向ける。

表情は暗く、沈んだ雰囲気醸し出しているなのは。そんな状態なのだから当然作業もはかどっている筈もなく、手元はあまり動いていなかった。

実はスザクに面会した後、なのはとロイドは純血のトップであるジェレミアに彼の無実を訴えに言ったのだが、やはり軽くあしらわれてしまっていた。

次にセシルは自分が作業しているモニターの隅に映し出している映像に目をやった。

映っているのは生中継の映像。そして今、生中継されるような内容は一つしかない。

二人の兵士に銃を突き付けられ、手足の自由を奪われた上に首に拘束具を付けられて声すら出せなくされているスザクが映し出されている。

『怨嗟の聲が、怒りの聲が上がっています。殿下がどれほど愛されていたかという証の声です。テロリストを裁く正義の声なのです』
「何も知らないっていうのは愚かで幸せですね」

今までずっと沈黙していたなのはが発した。そうね、とセシルも続く。

スザクはクロヴィスを殺してなどいない。殺したのは彼以外の誰か。その誰かのせいで今、スザクは裁かれるための階段を一步一步上っているのだ。

一応裁判という形で公判が行われるのだが、そんなものは形式的なものに過ぎない。純血派が裏で色々根回ししているせいで、その裁判はスザクを犯人にするために完全に仕立て上げられたものなの

だから。

だからなのは真犯人に強い怒りを抱く。そして同時に、何も知らずスザクを真犯人だと報道しているテレビ局にも怒りを覚えていた。

「ロイドさん！　なのはちゃん！」

セシルが慌てて二人を呼びつける。音声は切られて映像だけが映っていたため、彼らはよく分からないままに彼女の元までやってきてモニターを覗く。

画面いっぱいに拡大された映像には、黒い仮面を被り、黒いマントで身体を覆っている謎の人物が映し出されていた。

『私は、ゼロ』

『な、何者でしょう！？　この人物は自らをゼロと名乗り、護送車の前に立ちはだかっています』

『これは……』

「いやあ、なんか色々変わりそうだねえ」

なのはとセシルが真剣にモニターを見つめる中、ロイドだけは楽しそうにしている。しかし今は彼に構っている場合ではないと、二人は完全に無視していた。

その後、ジェレミアとゼロのやり取りが少し続き、ゼロが頭上で指をパチンと鳴らすと背後にあった箱がバラバラになってカプセルのような機械が露わになった。

『分かった。要求は？』

『交換だ。コイツと枢木スザクを』

『笑止！　この男はクロヴィス殿下を殺めた大逆の徒。引き渡せる訳が無い！』

『違うな、間違っているぞジェレミア。犯人はそいつじゃあない。クロヴィスを殺したのは……この私だ！』

「っ！？」

「まさかっ！？」

「真犯人だね」

ロイドもセシルも驚いているが、なのははそれどころではない。

この仮面の人物のせいでスザク君は！　それがなのはの思考を支配し、激しい怒りが鋭い視線を作り出してモニターの中のゼロを射抜く。

手は力一杯握られ、グローブなどをしていればギリギリつというような音が聞こえてきそうなほどだった。

ゼロが真犯人と名乗り出たことによってスザクが極刑を免れる可能性も出てきたし、無罪放免の可能性すら出てきた。

思えばゼロはスザクを助けるために出てきたのであろうが、なのはにしてみれば、元はと言えばゼロが原因でこうなったのだから許せるはずが無かった。

その後、詳細は不明だがスザクが解放され、現場はカプセルから噴出した煙に包まれた。その隙にゼロたちは逃げ、それを阻止しようとする純血派をどういう訳かジェレミアが邪魔していた。

しかしなのはにはジェレミアの事などどうでもよかった。彼女の中にはゼロに対する怒りと、連れて行かれたスザクの安否を気遣う気持ちだけがあった。

――廃墟と化した劇場

戦闘の影響なのか、完全にその役目を果たせなくなった何処かの劇場。ここには数人のテロリストとゼロ、そしてスザクの姿があった。

もともと、スザクとゼロは劇場の奥の方に二人だけにいるのだが。

「まさか本当に助け出すなんて」

「何なんだアイツは？」

「バカバカしいっ！ あんなハツタリが何度も通用するかつての！！」

「しかし認めざるを得ない。彼以外の誰にこんなことが出来る？」

日本解放戦線だって無理だ。少なくとも僕には出来ない。皆が無理だと思っていたブリタニアとの戦争だってやるかもしれない、彼な

ら」

「どうやら入口のあたりに居るこのテロリストたちにとっても、ゼロというのはごく最近だった人物のようだ。その証に彼の事を認めるか否かのような会話が行われている。」

「一方で、劇場の奥ではスザクとゼロが話していた。」

「相当手荒な扱いを受けたようだな。奴らのやり口は分かっただろう、枢木一等兵。ブリタニアは腐っている。君が世界を変えたいなら私の仲間になれ」

「君は……本当に君がクロヴィス殿下を殺したのか？」

「これは戦争だ。敵将を討ち取るのに理由がいるか？」

「毒ガスは？ 民間人を人質に取って！！」

「交渉事にブラフは付き物、結果的には誰も死んでいない」

「結果？ そうか、そういう考えで……」

「過程を無視して結果だけを見れば確かに犠牲者は誰一人として出ていない。それは揺るぎようの無い事実。」

「だがスザクはそれを認めることは出来ない。結果だけでいいというのであれば彼は名誉ブリタニア人としてここに居る事はないのだから。」

「私の所に来い。ブリタニアはお前の使える価値の無い国だ」

「そうかもしれない。でも、だから僕は価値のある国に変えるんだブリタニアの内側から。間違った方法で手に入れた結果に、価値は無いと思うから」

「そう言つてスザクはゼロに背を向けて出口へと歩み出す。」

「そして思った。なのはと一緒になら、本当にブリタニアを変える事が出来たかもしれない、と。」

「待て！ どこへ行く！？」

「後一時間で軍事法廷が始まる」

「バ、バカかお前は！！ あの法廷はお前を犯人にするために仕組まれている！ 検察官も判事も弁護人も！」

「それでも、それがルールだ。僕が行かないとイレヴンや名誉ブリ

タニア人に対して弾圧が始まる」

「だがお前は死ぬ！」

「構わない」

「バカだお前は！！」

懐かしい響きだった。まだ日本とブリタニアの戦争が始まる前、スザクには親友が居た。

親友の名はルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。その名が示す通りブリタニア帝国の皇子だった。最初は陰悪な仲だったが次第に友達としての情が芽生えていき、親友へと発展した。

そんな彼によく言われたのが『バカ』という言葉だった。

戦争終結後に離れ離れになってしまったが、先日の戦闘中に偶然の再会を果たした。

遺体リストには載っていなかったとロイドが言っていたことを思い出し、きつと無事なんだろうと内心安堵のため息をついた。

「昔、友達にもよく言われたよ。このバカって。僕の欠点なんだろうな……君を捕まえたがここでは返り討ちだろうからね。どうせ殺されるなら、僕は皆のために死にたい。でも、ありがとう。助けてくれて」

そう言っただけでスザクはその場を後にした。拳を強く握っているゼロだけが残されていた。

特派ヘッドトレーラーでは既になのはたちが作業を再開していたのだが、今度は全体的に作業がはかどってはいない様子だった。

というのも先程ニュースで流れたのだが、スザクから連絡が入り、法廷が開かれることになった。

今となつてはゼロの出現などによって容疑の証拠も曖昧になってきている。

釈放されるかもしれないという思いから、なのはもセシルも作業が思うように手に付かずになっていた。

ただ一人、ロイドだけはランスロットの重要なパーツが戻ってくるかも、という嬉々とした表情で作業していたが。

STAGE 02 その名はゼロ（後書き）

小説2話目で早くも原作4話目w

現在の予定では大きな流れとしてアニメ全50話に沿って進むのでペースが少し早くても中々終わらないかなというのが正直なところ
です。

なのはとスザクの関係、とくになのはの恋愛感情的な部分の描写も
していきたいので・・・。

感想を頂けると物凄く嬉しくて、画面の前で2828しています。
どうかぁ！一言だけでもおおお・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6895o/>

リリカルギアス～白の軌跡～

2011年11月11日13時06分発行